筑紫女学園大学リポジト

The Ofure hikae（1840）and the Ofurejou Utsushi（1864）in Honsho-ji Temple

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-04-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鷺山, 智英, SAGIYAMA,Tomohide メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/1071

史料紹介　品照寺文書

天保十一年「御触控」・元治元年「寺・国　御触状写　一」

鷺山智英

品照寺について

品照寺は福岡藩上座郡三奈木村（現福岡県朝倉市三奈木四二四一）に所在する。『筑前国続風土記附録』（文献出版・一九七七）には

品照寺　真宗西　仏堂方七間礎、堂宇焼失して今ハなし。法喜山といふ。本願寺門徒なり。開基理善ハ筑後国生葉郡大石村の産にて、天文の頃当国に来り此寺を建立す。永禄十年に死すといへり。

とある。

また『品照寺のあゆみ』（品照寺発行・二〇一三）によれば、福岡藩の筆頭家老を勤めた三奈木黒田家の第二代当主黒田一任から寺領を認められ、第八代当主黒田一庸からは本堂再建用の木材が寄付されるなど、三奈木黒田家から庇護されていたという。

「御触状写」について

「御触状写」は、福岡藩および本山である西本願寺から真宗西の触頭（万行寺・徳栄寺・光専寺が年番で勤めた）へ通達された文書が、さらに触頭から上座郡の触次である品照寺へ通達されたものの控えである。

品照寺に所蔵（現在は秋月博物館へ寄託）されている次の六点の「御触状写」を順次紹介していきたい。

①「御触控」　天保十一年
②「寺・国　御触状写　一」　元治元年四月
③「寺・国　御触状写　二」　元治元年霜月
④「寺・国　御触状帳　三」　慶応三年
⑤「寺・国　御触状写　五」　明治三年七月下旬
⑥「寺・国　御触状写　六」　明治四年七月中旬

今回紹介するのは「御触控」・「寺・国　御触状写　一」の二点である。

「御触控」は天保十一（一八四〇）年正月から文久三（一八六三）年までの御触の写しが綴られている。二十数年間のお触写しの中から

重要なものが選ばれて綴られたものであるのかもしれない。年次的には元治元（一八六四）年につながるものである。

藩からの御触には、宗旨改、藩士の人事異動、古銭の引き替え、忌中、横死人結縁の手順、大風の被害報告を求めるもの、異国人撰銭停止、英彦山山伏や浪人・旅人の止宿禁止など様々なものがある。本願寺関係の御触写しは三季並御仏飯志の完納要請など数点である。

「御触控」の中で注目したいのは台場の築立のために藩内の不要な金属を買い集めるとの御触を出していることである。「地金類所持之分ハ相当之直段を以御買上被仰付候」とあり、藩が買い取るとしている。これは文久三（一八六三）年八月のことである。同年五月十日は幕府が朝廷に押し切られて攘夷決行とした日である。この日に長州藩は下関において外国船を攻撃している。その後外国船が攻めてくることを予測し、福岡藩においても各地で台場の築立が進められたのである。

「寺・国　御触状写　一」は元治元（一八六四）年四月から十月までの御触の写しが綴られている。

藩からの御触には、宗旨改、浪人取締、天保度吹立金通用停止、金属指出、梵鐘などの書上指出、倹約、開港による諸品高騰、長州征伐、真宗僧侶の軍事人数指加および武芸稽古などがある。

本願寺関係では三門跡大僧正勅許祝、祖師六百回忌に朝廷より寄付、他国僧による法談禁止、牧市内暗殺、京都大火事、御直命御趣意書などである。

内容的に興味深いのは、この年八月に福岡藩からの要請で、真宗僧侶が攘夷のために藩の軍事人数に加えらることを決定したことである。そしてその後各郡の真宗僧侶が定期的に集まりを持ち、武芸稽古に取り組んでいくこととなる。

この動きの背景にあるのは同年八月五日に長州藩が四カ国（英・米・仏・蘭）連合艦隊から下関を攻撃され、惨敗していることである。この直後に藩は真宗僧侶を軍事人数に加えることを要請しているのである。この政策を推し進めたのは、真宗側と近い関係にあるという藩士、西川善兵衛と建部武彦の両名であった。

一方真宗側が軍事に協力することを承諾した背景には、当時の排仏的風潮があったと考えられる。この時期仏教教団は危機的状況にあり、特に真宗は危急存亡という危機感を持っていた。西本願寺が尊皇攘夷の立場をとっていたこともあり、攘夷のために武器をとり教団の生き残りを図ったのである。

また、僧侶が武器を持ち、戦闘に加わることの根拠を「仏之法衣を着し、殺生戒を守候僧分、殺生具を着し、人命を断候は境界不似合之儀とは乍申、一殺多生と申経文之趣意も有之、一を殺、多を救候儀は、慈悲之一ニ相成申候、依之武具を着し、御軍事ニ罷出、奉報御国恩度奉存」と、経典に見いだし、正当化をはかっているのも興味深い。

以上二点の史料は、幕末の政治および社会情勢が大きく変化していく様子を詳しく知ることができる貴重な古文書であると考えられる。

翻刻に当たっては、漢字は基本的に常用漢字を使用し、変体仮名は通常の仮名に直したが、江（え・へ）についてはそのままに示した。判読できない文字は■とした。また、敬意を表す欠字・平出は一字空白とし、平出については（平出）と傍注を付した。

翻刻に際し八嶋義之氏（筑紫女学園大学人間文化研究所客員研究員）の協力を得た。

（天保十一年正月）

「御触控」

秋改書物

切支丹宗門重畳御改ニ付書物之事

一当春御改之刻、拙僧幷母・祖母・兄弟、又は寺内之出家不残書出、宗旨帳之通当春書出申候、已後寺内江入人無御座候、弥此已後ニも入人於有之は、早々申断、宗旨帳書載、俗人之分は旦那寺之証拠判形致させ可申候事

一当寺内死人有之時、死骸棺中見届、取納之儀連々御掟之通、弥堅相守候事

一当春宗旨御改之刻、判形指シ置候通、今以相違之儀無御座候、弥宗門御改之御法度之通、無油断相守候、当寺内江切支丹宗門之者無御座候事

年号　　郡内四ケ寺

月日　　判形・花押

三ケ寺当

右之書物広形ニ相認、巻物ニて年々相納

天保十年亥六月

御触之写

大目付

於江戸櫛橋又之進殿思召ヲ以、先月三日（平出）御職分　被仰付候、此段向寄ニ相達候様、御月番五左衛門殿被仰聞候、其御心得御同役中被仰談、組支配江も可被相達候、已上

四月七日

右之趣可被相心得候、以上

〆

毛利長左衛門方・浦上彦兵衛方、仍願今十五日御職分（平出）御免被成候、此段可相達旨御月番五左衛門殿被仰聞、其心得御同役中被仰談、組支配江も可被相達候、以上

四月十五日

右之趣可被相心得候、以上

寺社方江

近来郡町浦ニおゐて頻ニ稲荷信仰之者多ク、居家抱内等ニ新ニ社を取建、有来之社ニて之詫（託）宣抔と相唱、下賤之者を迷せ筋不宜執行いたし候段相達候、且又法華宗・真宗を帰依いたし、間ニは日夜朝暮宗旨之唱事等いたし、仏道ニ傾き、自ら渡世筋疎相成、俗人不相応之儀有之、或はト筮之儀近来頻ニ売ト渡世之者多ク、間ニは諸人を迷せ候様之儀も有之哉ニ相聞候、右体之儀は御国政ニも相障候儀ニ付、御家中始郡町浦之者共、向後不勘弁之儀無之様可相心得旨相達候条、寺社之輩江も右之趣相心得、猥り之儀無之様可被相達置候、以上

右播磨殿より御達之趣被得其意、触下中江も不洩様可被達候、以上

三好市太夫

六月七日

木山平助

諸宗触頭中江当

右御触之趣可被相心得候、末々心得違之者有之、往々被仰出候御掟筋をも致忘却、御宗号を相汚候様ニ相成行歎ケ敷次第、畢竟教導方不行届より起き候儀と相見へ候、已後御国政ニ相障不申候様、弥以御宗教輝候様被申合、厚教導有之度事ニ候、以上

触頭中

六月十八日

諸郡触次中

御触書写

於(平出)公儀一位様、今十日(平出)薨去ニ付普請三日、鳴物停止、従(平出)公儀被仰出、普請一七日（今廿五日より来月二日迄）、鳴物二七日（廿五日より来月九日迄）

右

春松院方死去ニ付(平出)殿様御忌中、左之通

停止

一鳴物停止　五十日

一普請停止　一七日

一学問稽古・諸稽古　一七日

一諸士　四十九日　月代遠慮　正月十三日迄

一諸士、部屋住　二七日　月代遠慮

但被召出相勤候部屋住ハ諸士同様

一御扶助有之隠居　一七日　扶助有之隠居、諸士之二男ハ三日月代遠慮

一御目見医師　十日　月代遠慮

一御目見以下　右同断

一小人・小役人・坊主　三日　月代遠慮

一陪臣　三日　月代遠慮

一郡町浦扶助被下候者

右

右之通被得其意、郡内寺々早々可被相達候事

年番所

十一月廿六日

郡々触次中

一尾江四郎右衛門殿十月十四日転役、神代与三兵衛殿町奉行、本役寺社兼帯被仰付候事

右之通り御心得可有之候事

十一月八日

触次中

御触書写

従(平出)公儀被仰出候御書付之写相達、御国中不洩様可被相触候事

十二月十七日

御触之写

古金銀真字二歩判二朱、幷文政度之金銀卒字二歩判二朱銀・壱朱銀共通用停止被仰出候ニ付、当辰十月迄引替候様、去卯年相触候処、未タ引替相残も多分有之候ニ付、引替所之儀被差置候間、諸事先達て相触候通り、遠国末々之者迄相心得、引替方等閑ニ無之様、国々在々御料之御代官、私領之領主、地頭より入念可被申付候

右之趣可被相触候、以上

〆

左之御書付之趣可相触旨御用番三左衛門殿役中被仰談、組支配江も可被相触候、以上

正月三日

旧臘十三日年号弘化と改元之旨、従江戸申来候事

右之通可被相心得候事

一辰年分三季御仏飯上納不相済郡々ハ、当巳二月廿九日限無間違上納可有之候、延引ニ及候ハヽ、態飛指立候間、兼て可被相心得、郡内寺々へも可被相触置候事

正月八日　年番所

郡々触次中

大目付

京都西本願寺ニて(平出)浄光院様御所労之処、御養生無御叶、先月廿九日御逝去之旨御至来有之候、右は殿様御養母方御伯母之御続ニ付、常式之御忌服可被為(平出)請之処、日数相立御承知被遊候ニ付、三日御遠慮被遊候、依之今日より左之通停止之事

普請三日

鳴物十日

右御触之趣被得其意、配下之向江も不洩様早々可被相達候、以上

四月廿六日　東江(郷)三九郎

神代与三兵衛

諸宗触頭中江当

右之通御触ニ相成候条可被得其意候、尤従(平出)当御殿は今以何之御至来も無之候、追て追(ママ)て御知らせ可有之候哉、先ツ右御触之通被相心得、諸事質素ニ相慎可申儀ニ候得は、重畳入念寺々末々迄可被申参候、右之段郡々一統江早々可被相触候事

一辰年分三季幷御仏飯御志、郡々相納候処、不納之向も有之候、来月五日限堅不納之向上納可有之候、同日迄も差出無之候ハヽ、御世話方法中より出方之上可及取立候、此段堅可被相達候、以上

年番所

四月廿八日
郡々
触次中

御触之写

一筆申触候、然は同役久野甚平儀退身願差出候ニ付、当時助役高原杢之進江被仰付候条為御知此段相達候、以上

小河武兵衛

三月四日

〆

東江(郷)三九郎今十二日より御用召ニて、於(平出)御前町奉行被仰付候、被得其意配下之向江も可被相達候、以上

神代与三兵衛

三月十二日

寺社境内ニて願成就幷追善抔唱、角力・踊其外人寄之儀、境内借り受之儀も有之歟ニ相聞候、右等之儀も何事ニよらす、以来ハ相対ニて無之、其度々役所江申出、差図之上貸方有之候様触下之向重畳可被相達置候事

東江(郷)三九郎
神代与三兵衛

三月

万之丞様御疱瘡御養生不被為叶、御停止触有之候得共、大急之儀ニて触出不申候、為念此旨相達置候事

人相書

長崎会所吟味役勤方其後放役申付八兵衛事

河間八平次

一中背　一中肉
一顔丸之色青黒き方、面部一体腫気有之様相見候方
一鼻耳　常躰
一眉濃く、毛長き方
一目細く眼くほみ、目印　繁き方
一髪薄く白髪交り、髷先小き方
一言舌のろき方
一年齢六十歳位
一其節は衣類小袖、羽織着、脇指、帯、股引、京鞋はき出候由

右之者三月二日頃欠落致候事、右之御触之趣被得其意、人相書ニ似寄候者無之哉、有無とも来月廿五日限申出之事

年番所

四月廿八日
郡々
触次中

御触書写

一筆申触候、然は野坂利右衛門同役ニ被仰付、是迄高原杢之進儀は助役被仰付置候処、御免被仰付、左様御承知有之、御触下寺院江被相達候、以上

小河武兵衛

八月九日

諸宗寺院触頭江当

〆

大目付

三左衛門殿名播磨と被相改候、此段相触候様、御月番又之進殿被仰聞候、其御心得御同役中被仰談、組支配下江も可被相達候、以上

八月廿一日

右両通之趣可被相心得候、猶又早々寺継を以郡々巡達有之、留より年番所江可指返候、以上

九月二日

年番所

郡々

触次当

弘化三午十二月　御触

覚

横死人証拠之不及沙汰ケ条左之通、天明年中被相達置候通りニ候、然ルニ是迄各横死之次第、旦那寺江は庄屋・組頭より相届ケ候上、致結縁候と相聞候、右取計ヒニては不承知之寺も間ニは有之趣ニ付、以来は右横死ニ紛レなく、外ニ少之怪敷儀無之候ハヽ、郡代・大庄屋江相達、右達書を以大庄屋結縁之儀取計ヒ取納させ置、右之趣前月より翌月初メニ拙者共手元江申出ニ相成候様申談置候、旦那寺幷ニ庄屋・組頭より委細跡届之儀は、是迄之通り可被相心得候、右之趣は寺々江も可被相達置候事

一雷ニ　被打

一水ニ　溺れ

一其身怪我

一行倒レ者

〆

右之通り郡内江も被相達候事

年番所

十月

触次中

御触書写

当巳六月・八月大風ニて左之四ヶ条転家有無御入用ニ付、触下相調子否、別紙案文之通来ル八日限リ可被申出候

仏閣　土蔵

神社　居宅

六月大風ニて何間四方分　転家

半転

八月大風ニて何間四方ノ分　転家
　　半転
仏殿一ヶ所
　何郡何村
　　何寺
　庫裏
　土蔵
右之通り来ル七日限り郡々有無共指出を以無間違可被申出候事

一追々相達置候願向上納、早々可被相調候事
　　年番所
十二月二日
　郡々
　触次衆中

当時郡方御取締筋委細被仰出候義は、追々承知有之通リ、然処当年祖師遠忌ニ付大法会執行在之段は、其筈之義ニ候へ共、間ニハ表立之法事之趣頻りニ申立候て、普請等いたし、或ハ仏具等種々仕立、其末旦家之者共江出財致させ候ニ付ては、何レも甚難渋不少由風説之趣相達、自然左様之儀ニ共相至り候ては、当御時勢曽て不相済次第ニ付、右之辻は厚勘弁、猥ニ勧化等之儀無之様厳重ニ相心得可申旨、訖度相達置可申候事
　未三月
右は浄土宗へ達之趣ニ候へ共、一派ニ及ひ候事

　御触写
宿筋通行向、於途中ニ相煩万一致死去、右死骸持通候節、付添之者より止宿之儀自然相談ニ及候ハヽ、右宿手之儀は宿役共より寺院江申入、勿論付添之者賄等之儀は、毎事宿方より仕出候様取計可申、右之趣為念宿筋向寄之寺院江御達可被遣候事
　　惣郡奉行
　未七月
右之通惣郡奉行より及引合ニ候条、被其意得、宿筋向寄配下寺院之向江早々可被相達候事
　七月十八日
　　団半十郎
　　浜兵太夫
　触頭中当

右御達之趣郡内中江早々可被相達候事、尤右死人通行筋ニて無之共、自然致通行儀も候ハヽ、本文之趣以可被心得置候様有之度候事
　　年番役所
　七月十八日
　郡々
　　触次中

　宗旨奉行より達
　触頭中江

宗旨御改之儀ハ前々より御作法有之、毎春於役所申渡儀ニ候、然ルニ間ニ

ハ心得方等閑之寺も有之、判形出方及延引、重き御改之御作法も難相立不相済次第ニ候、依て重畳御詮儀之上御治定之趣、御月番石見殿依御指図、以来左之通り改正被仰付候、其旨御心得、一派之寺江早々被相達候事

但本文之趣寺々江相達候後、請書調印有之、来月廿日限役所江可被指出候事

未六月

触次中

一春改之節病気指合ニて判形未進之寺、右未進之訳合堅差出ヲ以役所江相届候様自然右届方及延引候節

科料銀弐両

一右未進之向堅七月中ニ役所江罷出、判形仕候様、若七月廿九日迄出方無之、病気指合之届無之向

科料銀弐両

本文之通相通儀ニ候へ共、指向候義ニ付当年ハ八月廿日迄日延

右七月廿九日迄病気指合ニて出方難相成向は、日延の儀願書ニ触頭奥判ヲ以相願候ハは、其節及差図候次第も可有之候、右願書も不指出期日ニ外候向

右は弐両

一触頭寺院ハ秋改書物未進判之向、十二月廿日限届方之義は春改之通ニ候事

但上納方之儀は其触頭々より相達候条、上納証拠相添、三十日限宗旨役所江可相納候、尤右日限越候ハヽ、月越科料其触頭より左の通上納之事

右ハ二両

未六月

右之通被控置、心得違無之様重畳勘弁有之、厳重取締可有之候事

覚

一近年来御国中法中之内、御国中通行之節、御用之振を以先触等指出通行等いたし候儀は無之哉、右は御法も有之候儀ニ付被得其意、不都合筋無之様可被相心得候、右は細敷御詮儀有之候処、御寺法よりも先般被仰出、厳重ニ可被心得候旨ニ候条、郡内法中へも毎時可被申諭事

十一月五日

触頭中

触次中

一石見殿死去　八月廿二日

一種姫様死去　九月廿七日

普請　一日

鳴物　廿五日より八日迄

九月廿七日触出

一浦上帯刀方　御職分

十月十五日

近来寺々ニおひて追々講会之風説有之候処、右先年被指留置候講談ニ似寄候歟之趣ニ有之候、左ニては人気ニも相抱り不宜事ニ候、間ニハ役所聞済

ニも相成候抔申触有之歟之由、何分不相済事ニ付、訖度可遂詮儀ヲも筈ニ候得共、是迄之処は不相乱候ニ付、此以後事替たる講相催候儀風説相達候ニおいては取調へ、無用捨御咎被仰付筈ニ候、畢竟右体之儀寺々江相進メ候者有之候より存立候儀ニも相聞候、此以後ハ右体之者ハ取調へ之上、其者支配方ニ及引合重き御咎ニも可相成候条、其旨相心得候様触頭々々より厳重可被相達候事

団半十郎
浜兵太夫

未十二月
触頭中当ル

右御触之趣被得其意、郡内法中江厳重可被相達置候、於両市中も右等取行候向は稠敷御詮儀有之、郡々も右等之儀候ハヽ、急度可被　仰付候事ニ付、此旨急々可被達置候事

年番役所

十二月
触次中

一筆申触候、然は御用雑費切立目録、別紙相達候、七月廿日限、一郡之分被相揃無延引可被相納候、及遅滞候ては利分等不足ニ相成候条、日限之通り上納可有之候、日限及延引候節は郡別態飛脚可指立候間、堅無延引様御取計可有之候事

一光専寺久々病気ニ付隠居被仰付、五月廿八日新発意謙渓江住職役儀共ニ被仰付候、右之段郡内寺々江可被相達候事

一弾正殿名山城と改名被仰付候段、相触達有之候、右之旨一統江可被相達候事

一立川休兵衛殿老年ニ付願之通、六月十日隠居被仰付候事

一寺井茂八郎殿、六月十六日宗旨奉行兼帯被仰付候事

右之通り郡内江可被相触候事

年番役所

六月
郡々
触次中

秋月領より

以廻状申述候、然は井上庄左衛門転役被仰付、右跡寺社宗旨奉行御役儀、土方彦四郎江兼帯被仰付候、此段御知らせ申述候、御承知可被成候、以上

宗旨役所

六月十九日
寺々

一大森浅左衛門儀、今廿六日町奉行助役被仰付候、被得其意、配下中江も可被相達候事

五月廿六日

一今般旅人逗留之儀厳敷御取締被仰出候ニ付、浪人体之者と見受候ハヽ、早速

追立、其旨可申出候、其外之者たり共惣て旅人逗留いたし候ハヽ、生国名元用向の次第委敷取調子可申候、無拠分は三夕迄ハ被指免候

一社引除之寺社、追々役所より入込、夫々寺社をも不絶相改候筈ニ候得共、宿筋又は村々居住之寺社ハ御郡代、御代官、茶屋奉行江取締方被仰付置候ニ付、同方より差図之通り訖度相守可申候事

五月廿七日　　年番役所

右之趣郡内江早々可被相達候事

触次当

甲斐守様於江戸御病気、御舎弟篤之允様御養子之御願御請取ニ相成、六月四日御卒去ニ付、六月廿四日より三日鳴物停止被　仰付候、右（平出）篤之允様御名末々迄付間敷旨御触達ニ付可被得其意候事

年番役所

七月四日

触次中

郡町浦奉行江

異国人撰銭相望候ニ付相場も格段宜敷ニ相聞へ候、就ては御国内ニても旅人入込可買集哉も難斗、左候ては御国之利を他江被掠故、終ニは唐銅銭払底ニ可相成行ニ付、向後撰銭ハ決て売渡不申様、一統江可被相達候、若密ニ売渡之者見当り差押申出候者有之候ハヽ、右撰銭御引揚ニ相成、指押候者江可被下候条、右之趣可被相達候事

但旅人両替之儀ニ付ては追て相達次第も可有之候条、其心得有之、多分之正銭ハ猥ニ両替不致様可被相達候事

申四月

撰銭旅売いたし候趣相達候ニ付、旅出停止被仰付、就右何れの口敷見ケ〻方重畳申付度、右停止ニ付ては難渋之ものも候ハヽ、相当直段ニて御買上ケ被下候ニ付、無泥御到来所引合候様有之度、右之趣郡町浦不洩候様早々御触達御取計可有之候事

七月六日

町奉行衆
惣郡奉行衆
浦奉行衆

当時勢正銭払底ニ付大坂表より融通為弁利、当百銭追々御買下ケ之上、通用被仰付筈ニ候、尤上方表ニてハ九六之通用ニ候へ共、依御詮儀、以来諸上納諸渡り共、丁百通用被仰付候条、御国中無差支様取引可致候事

八月

裏判役

右之趣被得其意、御国中配下中不洩様可被相達候事

寺社兼帯
町奉行

右御触之趣被得其意、寺別可被相達候事

八月廿日

年番役所

近年不容易御時勢ニ押移候ニ付、御台場御築立、大炮御鋳立専の御時勢ニ付、不用之銅・唐金所持之者、御家中を初、町ニ共御買上ニ相成、又は志有之向は寸志差出申候、然ニ余分御入方ニ付、寺社銘々持伝分入方手遠、地金類所持之分ハ相当之直段を以御買上被仰付候条、員数可被申上候、且又志有之寸志差出候向江ハ追て御沙汰も可有之候ニ付、配下中江も能々御時勢を被申諭、速ニ申出候様、急々可被取計候事

但申出振、左之通り

一何斤　銅
一何斤　唐金

月日

寺社兼帯

八月　町奉行

別紙御触之趣重畳被遂勘弁、御国恩を奉存、寸志被相運度候、所持之分有之候ハヽ、以書付早々可被申出候、郡内寺々江此段可被相達候事

年番役所

九月

触次中

一去戌正月相触置候、猥ニ頭巾を用、手拭ニて面体ヲ包、致徘徊候者不少ニ付、重畳御停止被(平出)仰付置候得共、緩かせニ相成候ニ付、此以後右体之者ハ手筋より無用捨姓名を承り申出候様、御達ニ相成候ニ付、其旨相心得、配下中不洩様被相達候事

十二月

彦山之山伏左之名前之者共致出奔、専ラ御詮儀中之由ニて当御領内江入込、止宿等ハ致不申哉、精々遂穿鑿候様、見当り次第捕置申出可有之、右捕方之儀は盗賊改方江被相達置候ニ付、支配中不洩様可被申達候事

但シ配下中止宿有無、此先見当次第可申出旨、早々可被申出候事

一厳瑶坊事　佐竹織部
一祐玉坊事　柏木民部
一教歓坊事　藤山衛門
一中之坊事　阿部　進
一水門坊事　水口寛次

右

寺社兼帯

町奉行

十二月

近来浪人体幷旅人御国内へ入込多く、寺社向へ一宿等申入候得共、御作法も有之事故、聞入有之間敷候得共、間ニ押て願入候儀も難斗候、近来之御都合故此節取締方改て被(平出)仰出候ニ付、尚又厳重相心得可被申候、両市中ハ不及申、御国内江一統詑度取締り可申、就ハ左之ヶ条をも相心得可申候事

一浪人体幷旅人共押て一宿を乞候歟、又ハ自然不法之所行有之候ハヽ、両市

中ハ其町之年寄、在々ハ其村之庄屋、村役江速ニ申通候ハヽ、其所より取締候様、其筋へ引合置候条、其旨可被相心得候、尤旅人等一宿為致居候哉、其処之役人より廻り方いたし相心得可申候

一宰府・宝満参詣、年来参り来り候檀家之内無拠一宿不為致して不相済分は、国・所・姓名相留置、毎月十日限り一山之分取集メ、厳敷役所江可申出候、尤事替り候体之旦家分ハ堅相断可申候

但一宿いたし自然病気之者出来致候ハヽ、其旨役所へ速ニ可申出候事

自然異変有之候節ハ、以直飛脚速ニ注進可有之候事

一不勘弁ニて往来不相願、旅出候者於有之は、後日訖度御咎被　仰付候事

右之趣配下中江不洩様被相達候

（裏表紙）

天保十一年子正月

法喜山

「元治元年子四月　寺・国　御触状写」

一筆致啓達候、先以三御門跡様益御機嫌能被為成御座候間可為御大慶候、然は今般（平出）新ニ　御門跡様大僧正御願被為在候処即日被為蒙（平出）勅許、別て此度は御幼年、殊ニ　三（平出）御門跡様御揃御同官之御次第、古来無之儀一入可被為恐悦候、尤先格之通り御祝儀可差上候、恐惶謹言

嶋田右兵衛少尉

下間大蔵卿法眼

下間大進法印

院家衆中

内陣衆中

余間衆中

三間衆中

飛檐衆中

ㇾㇾ

惣坊主衆中

惣門徒衆中

追啓、本文之趣被奉敬承、早々上京御祝儀可被申上候、尤此度は格別之御慶事ニ候得は差急上京御祝儀可被申上候、猶又門徒中江も不洩様被申達、精々御馳走御取持可申被成候様御心配可有之候、依て此段分て申達候、以上

御太刀料銀五両　院家中
御馬代　同壱枚　内陳(陣)中
御門跡様江　余間中
　金百疋
新門様江
　金百疋
　右新発知意

一太刀料　銀五匁
一馬代　同五両
御門跡様江
　金五拾疋
新門跡様江
　同断
　右孫新発知意

右同断
　銀五両　廿四輩中
御門跡様江　三ノ間中
　金五拾疋　飛檐中
新門様江　初中後中
　同断
　右孫新発知意

　銀二両
御門跡様江　同三匁
新門様江　同三匁
　右孫新発知意

　右同断
　銀三両
御門跡様江　国絹袈裟中
　同壱両
新門様江
　同壱両
　平僧中
志次第

達書

筑前国御末寺中

他国僧猥ニ相招法談為致候儀は古来御制禁ニて、連々被仰渡も可有候、既ニ天保十四卯年御寺法御取締ニ付、厳重被仰出候事ニ候、然処中ニは心得違之輩、右制禁ニ相背候趣相聞、不埒之事ニ候、若向後等閑ニ相心得不相守輩も有之達御聴候ハヽ、相招候寺々は勿論罷越候人体ハ御取調之上急度曲事可被　仰付候間、堅く心得違之儀有之間敷候、尤門徒末々迄兼々可申聞置候、依て此段申達候也

亥十二月

下間大進法印
下間大蔵卿法眼

嶋田右兵衛少尉

尤役場は当時寺井茂八郎宅江出方之事

一筆申触候、然は当御時勢ニ付、為取締宗旨奉行一役被相立、右御儀拙者共江昨六日被仰付候、尤寺井茂八郎は右兼帯御免被成候、且又増田門太儀、右助役御免被成候、御承知可有之候、配下寺院江も可被相達候

荒戸五番丁
久田七之丞
西新町新地
小野三六

子四月

御触状

一当子二月廿一日、年号元治と改元之旨、京都より申参候事

大目付

寺社兼帯
町奉行

一近来禅宗立入之者と法華宗之僧侶と宗法之儀ニ付毎度出会、時宜ニ依ては宗論ケ間敷儀を企、双方共ニ方人多く有歟之趣ニ相聞へ候、且又千ケ寺参と号し間ニは加持祈祷之修行を専らニ志、病家抔ニ数日相滞り、昼夜読経のみ致し、甚敷ニ至ては医薬も繕て相断、終ニ落命ニ至り候者不少由、右体加持祈祷之儀ニ付ては先年来心得方之儀追々相達置候処、日々相弛ミ居歟相聞、彼是不埒之次第ニ候、已後ハ手筋より訖度取調候様達置候条、其旨相心得厳重取締候様郡町浦江相達候事

一近来御国内江浪人体之者入込、既ニ今廿五日暁方、於舛木屋及狼藉逃去之段相達、追々及御詮議候得共、寺院境内を初山林江相隠居候歟も相斗かたく候条、境内は申ニ不及、山林とも厳重ニ穿鑿之上訖度取締、自然右体之者身当り候ハ、速ニ役所江可申出候、配下中不洩様急々可被相達候事

一吉田太郎・中原出羽守、昨朔日太郎宅出刻、既ニ牧市内方為有手疵之刻、既ニ引合時ニて多く、両人之仕業と相聞候ニ付、召捕之方之儀ハ手筋江も相達ニ相成候儀ニ候得共、猶又寺社町とも重々取締、自然右両人共一件承知不致、召置候をも候ハヽ留置、速ニ申出候様大目付江被相達候条、其節は役所江速ニ可被申候、被得其意、配下中江も無洩落様可被相達候事

大目付江

頃日浪人之内ニて多人数入込及狼藉候旨追々相達候付、専ら御詮議中ニ候、右ニ付てハ御家中町々共夜中廻り方等厳重ニ被仰付儀ニ候得共、手広之儀ニ付当時取締左之通被仰付候条、弥厳重相守り請持之場所不絶見廻り、若怪敷もの見当候ハヽ、姓名・行先等承り、面体も相改、疑敷者ニ無之候ハヽ指通可申候、自然胡盞成者ニ候ハヽ指留置、其支配方江早々可申出候、若異儀ニ及ひ候節は打捨候共不苦候、尤卒忽之取斗等有之候ては決て不相済儀ニ付、其辺りは訖度致勘弁、大身之面々は家来々々江も重畳可申付候事

右之趣相心得見廻り弛かせ之儀無之、御取締向厳重行届候様可相心得候事

侍屋敷中

小身之面々ハ近辺拾軒余も申合、四五人充請持場不断見廻り可申、尤大身之面々ハ近辺申合次第、半礼以下之者共、地行・春吉組屋敷壱町充受持六

七人充
　両市中
一町充受持人数拾人斗充、不絶見廻り可申候事、両市中入合村々、右町ニ準し取締の事

元治元年子三月

近来浪人体之者入込ミ、猥ケ間敷儀も有之候ニ付、為取締之闇夜廻り等も猶厳重ニ被相立筈ニ候、然ニ夜中往返之者、無提燈ニては胡乱者ニ紛れ疑敷相聞候条、以来は両市中其外共徘徊之者必挑灯相用可申候、万一無挑灯之者、或面体を隠し候者見当り候ハヽ、右廻り方より無異儀指押相糺筈ニ付、其旨相心得訖度取締候様、御家中幷郡町浦江も可被相達置候事

寺社兼帯
町奉行

子三月廿八日

右御触之趣被得其意、郡内急達有之、決無等閑相心得可有之候事、就用事出府、両市中徘徊之向も可有之候間、一統能々右御触之趣相心得可被申候、万一無提燈等ニて不都合之儀有之節は御一宗之汚名と相成候条、返々勘弁ニ可有之候事

年番役所

一筆申達候、然は諸宗寺院宗旨御改出方之儀、昨未六月御改正被（平出）仰出候通り、秋月表御同様ニ相成度趣、同方宗旨奉行より及引合候、且又別紙寺々右御領内江旦那有之候ニ付、御領御改之節日限無相違出方判形可有之趣、尤病気又は差合ニて難罷出向ニは其訳合指出を以、同方宗旨役所江申出有之候様可相達旨、是又及引合候間、別紙寺々江重畳可被相達置候、此段相達候、以上

牧市内
立川休兵衛

三月

諸宗
触頭中

下座郡
品照寺
清岩寺
正福寺
円能寺
見生寺
以上

右御触之趣被得其意、早々厳重可被相達置候、若等閑之儀於有之は越度可被　仰付候事
且又夜須郡之内ニ御笠・上座入交り、上座郡之内ニ下座入交り候得共、御触之侭相差廻、急々御達ニ付、則写相達候間被得其意候、能々相改られ夫々無間違写取、急々可被相達候事

申三月

年番役所

郡々
触次中

尚以飛脚賃銭触次より取替、無間違此飛脚江可被相渡候事

一筆申触候、然は当春宗旨帳奥判御見届ニ付、両市中江旦那有之寺院は左之日限之通り四ツ時揃ニて、御改所江出方判形可有之事、尤病気差合等候ハヽ、其旨差出を以年番所江可被届出候事

覚

五月八日　福岡御改所
　　徳栄寺
五月十日　博多改所
　　万行寺
〆
五月五日　年番役所

郡々触次
各中

右之旨急々可被相達候事

禁裏御所より
御宸翰
式咲徳文
仏布施
御伝来
御香木
親王様より
御香炉
白銀三拾両
准后様より
被物
白銀三拾両

御開山様六百回御忌御法会ニ付、右三通御寄附御備被（平出）仰出候、別て式咲徳文・御宸翰御寄附之儀は格別厚、以（平出）叡慮被　仰出候儀、祖師御遺徳益相輝、浄土真宗惣（平出）御本廟之御由緒弥以相顕、不容易之御規模六百年来之御光栄、天恩深被為在（平出）御感戴候間、御門末末々ニ至迄猶更難有可奉存被　仰出候也

酉三月

此度寸志上納ニ付、寺々心得之覚

一郡々一統御手伝等も相掛り可申候間、寺々寸志献上之分は門徒江出財掛ケ候儀は甚差支候儀ニ付、誠ニ一飯之端より御国恩を奉謝思ニ住懇志上納可有之候

御台場御用抔と称し、表立門徒江掛色々風評を受候様成行、御郡方より御引合ニ共相成候様有之候ては一派之面皮ニ相掛り、　御一宗之故障と相成候ては以之外不都合ニ付、急度可被相心得候事

一寸志上納之儀は（平出）中将様御直御覧ニ相成候事

一上納高正金三百両決之事
一御家中其外諸宗より追々寸志願出ニ相成、一派相後レ候ては甚以不面目之次第ニ付、重畳可被遂勘弁候事
一御役所より（平出）上江御伺ニ相成候儀ニ付、一日も延引候ては此節は不相済儀ニ付、右之趣急度可被相心得候事

亥四月　年番役所

平僧　金壱歩二朱
国絹　同三歩
次第　同壱両二朱
飛檐例座　同壱両二歩
三之間常末　同壱両三歩二朱
余間　同二両壱歩
内陣（陣）　同二両二歩二朱

一学業精不之事
　但弟子伴僧ニ至迄
一門徒教導行届幷行状之事
一乱衣着用聞有之有無之事
一国法より褒美ニ預り候人体有無之事
一血誓未相済人体
一御遠忌御請高堅上納之向
右之件ニ実事言上可有之事

奉指上候御答

一学業出精之事
右は言上仕候程之人体も無御座候、奉恐入候、此上は出精仕候様一同申示可仕候間、是迄之不出精御容赦奉願上候
一門徒教導之事幷行状
右は相成丈出精仕、行状急度相慎可申候
一乱衣着用之事
右は見受不申候、此後万一不心得之者も有之候ハヽ、相互ニ吟味仕候間言上可仕候
一国法より褒美ニ預り候有無之事
右は御賞誉ニ預り候者無御座候、以後国政之一筋ニも可相成様可仕候
一血誓相済有無之事
右は下座郡何寺・上座郡何寺相済不申候、来冬まで上京可仕候
一御遠忌御手伝
右は皆上納仕候向無御座候、甚奉恐入候、以上

下座郡　何寺
上座郡　何寺

文久二年十二月

嶋田陸奥守様
嶋田右兵衛少尉様

口達

一御改一件ニ付願書被指出、御役所江指出致候事
一御改一件寺社奉行衆江御席江万事頃日御伺ニ相成候、定て近々御指図可有之候、郡奉行より改出郡之筈ニ相成候由ニ候処、郡々不帰服之模様ニて、出郡見合ニ相成候段、寺社方江引合ニ相成候由ニ付、諸事近々御指図有之迄何事も見合置可有之候

三月廿二日　年番役所

口達

相限御寺・国両御用ニ付触次幷能々差心得候老分二ケ寺宛り印判所持ニて、来廿九日四ツ時年番役所江出方之事
一郡々寺々住持・後住・隠居・二三男・伴僧丈ケ現人数横折ニて控共二通宛り銘々年齢書入、廿九日出方之節堅可被指出候、御役所急達ニ付少も延引無之一郡一帳ニ認之事

五月廿三日　年番役所

御触状写

大目付江

天保度吹立候弐朱金之儀は追て通用停止可被仰付候旨、所持之者は早々引替可差出候、引替為御手当百両ニ付金三拾充持主へ可被下候間、御金改役所幷江戸・京・大坂、其外諸国引替御用相勤者共之内、早々差出引替可申候

右之趣御料は御代官、私領は領主・地頭より不洩様可被相触候事

五月十九日

右之趣被得其意、配下中江無洩落様可被相触候事

寺社兼帯町奉行

五月

右御触之趣可得其意候

年番役所

御触写

大目付江

此節家中江別紙之通被相達候条、御国中之寺社江も所持之器物・地銅ニ可相成分は御買上之筈ニ候、係ル時勢厚加勘弁、成丈速ニ指出候様可被相達候事

五月

大目付江

追々大炮御製造ニ付御家中を始メ銅器類寸志ニ指出候向も有之候得共、根元御大造之儀ニて未タ多分之地銅御入用之処、当時柄難被及御手御鋳立隙取、御配慮被遊候時勢、無御余儀御趣意、厚遂勘弁可申候、右ニ付御家中末々所持致し器物・地銅ニ可相成分は銘々志し次第ニ指出之儀可為尤候事
右之趣御家中一統末々之者迄可被相達候事

奉行三人

五月

大目付江

当時勢ニ付要地ニ御別館御取建被　仰出、猶又海岸防禦筋、弥以厳重御手当ニ相成筈ニ候、然処近年莫大之御物入打続、又々御財用繰必至と御指支ニ相成、御気悩被遊候、加之御武備ニ付ても余分之御物入相見候条、旁以非常之御大倹被執行候、右ニ付御家中半所務ニも被仰付候処、武備覚悟筋専要之時節、且文武執行筋専御引立之折柄ニ付、深以御趣意半所務ニは不被　仰付候条、半所務之心得ニて相暮、武器手当向速相調、文武修行筋猶又相励可申候、御大倹之儀ニ付ては追々被相達儀も可有之候得共、銘々厚加勘弁、急速大倹之仕法相立覚悟筋専一ニ可被心懸候事

大目付江

非常御大倹被執行候段は先は被相達置候通りニ候、然処此節は定て委細御制度可被　仰出、左候ハヽ訖度御趣意相守、節倹執行可申と一統被仰出ヲ奉待情態と相聞へ遊惰之弊風を改メ奢発罷在候段、一段之事ニ被思召候、然ニ斯切迫之時勢ニ相成、衣食住・音信・贈答等鎖細之御規則、今更被仰出候場合無之条、御家中一統今日より弥以大平論安之心を改義気致奮起、三ケ条御法令之筋御趣意不致忘却、各分限を守、諸事簡易無造作ニ打替り、断然と大倹執行候、敵を眼前引請候心得ニて速ニ武備を整、何時異艦来襲候共御国辱ニ不相成様、訖度忠勤之可致覚悟候事

本文之通り御制度不被相立候条、間ニは目途無之望を失ひ、頻りニ致慷慨輩も可有之哉と其辺り御気悩被為遊候ニ付、中老初諸役人中同列同役限り申合セ、組支配之面々ニは規則相立可申出候、左候ハヽ御折中之御処置被仰出ニて可被有之事、右之趣御家中一統末々へも早々可被相達候事

五月

右之通り御家中一統へ被　相達候条被得其意、一宗限り規則相立、触頭より速ニ役所江可被申出候事

寺社兼帯町奉行

御直命御趣意書

即今之形勢ニ付一同馳上、本廟之安危を心にかけ上京之心底、全法義深厚之至と深感賞セしめ候、猶此上如何可相成哉、何卒法義之上より予か旨趣ニ従ひ、力を勠セ、忠節を可被抽（ヌキンデ）候、既ニ当春も以直命申聞候通に候処、当春ニ至ては弥切迫ニ相成候次第、於予深恐入斗ニ候、就ては手許を始家中之者迄も出格之取締ニ及候事ニ候、抑寺門之儀は武備も不行届ニ候へ共、兼々示置候通り安心決定之上よりは報国之為ニは不惜身命之働可有之、此全石山法難之先蹤ニて厭離穢土、欣求浄土之思ニ住し、先手下（モト）之安心決得可有之、其安心と申は兼々示す如く諸の雑行自力之心を捨て離れ、一心に阿弥陀如来を頼ミ奉る一念帰命之信心たに堅固なれは、順次之往生疑あるへからす、其報恩之為ニは恒時に念仏して畢命を期とすへく候、猶亦時勢を顧ミ弥行状を謹ミ、質素を守り、奢侈之振舞なく、上（平出）仏祖之冥見を恐れ、下檀施を償ひ、天下之遊民に不相成様心かけ、修学怠慢有之間敷、依て此旨門徒末々迄不洩様厚教諭可致者也

亥八月

御直命御趣意書

攘夷之一条ニ付先達より心配之趣、猶又追々及切迫ニ形勢も相変候ニ付て

は危急之次第、予も実ニ痛心之至りニ候、右ニ付室内を始メ家中等取締之次第、不日ニ申達候次第ニ候条、此上偏ニ攘夷之(平出)叡慮ニ遵奉致し、勤王之忠節を専とし、報国恩候様厚心配可有之段深頼入候也

亥八月

御触状御趣意

御国中寺院ニ有之梵鐘・喚鐘、右斤数極々急々御入用ニ付、来ル十二日限触次より郡中之分取集、壱帳ニ相認、年番役所江可被差出候、延引之節は其寺号御役所江書上可申間、少も遅滞無之様可被相心得候事

申出方

梵鐘何斤

喚鐘何斤

寺号

七月六日

触次中

猶以諸品高直ニて是迄之賃ニては飛脚難参候条、左之通可被相渡候事

正銭二百五十文

右元治元年子七月之触也

一筆申達候、然は異船渡来、御軍事一件之儀ニ付　御達之(平出)御用有之候条、郡内寺々一統印判所持、来ル十六日四ツ時年番役所江堅無不参可被罷出候事

子八月十日

触頭中

触次中

御直命御趣意書

今般不存寄大変、(平出)朝庭(ママ)ニも被悩(平出)晨襟候段深奉恐入、尚又京師之庶民一同ニも遇火災、家宅什器都て為烏有、饑渇露宿等之困苦、実ニ気之毒至ニ候、然ニ本廟ニ於ては此度も無別条次第令安慮候、全は仏祖之加被力、且は各一同法儀之上より不惜身命之働之致す処と、仏祖之御洪恩を仰き、又は一同之懇念と難有覚へ候、殊に秋暑烈敷折柄、将世間忽劇之中をも不顧、遠路為見舞早速上京深志之程不勝感賞、猶此上厳護法城之志希斗候也

子七月

達書

筑前国御末寺中

門徒中

今般京都大変過半焼亡、(平出)御本山ニも実ニ御危急ニ付山科御坊所江御立退之処、先々御門外限ニて御別条無之、廿五日御真影御還座、(平出)三御門跡様ニも無御恙還御被為在候条、一同可為恐悦候、猶委曲明蓮寺淡雲可有演説候、依て此段申達候也

甲子七月

下間大進法印

下間大蔵卿法眼

嶋田右兵衛少尉

冨嶋頼母

各在判

御触状

大目付江

御本丸御時来ル廿五日朝より六ツより当時鐘ニて、時之数駿々と撞候事、
従(平出)公儀被仰出候左之御書附之趣御国中不洩候様可相触候間、御月番長
門殿被仰付、被得其意、組支配江も可被相触候事
神奈川開港以来、外国人相届候品は無(ママ)鍋相場羅上ケ、競て貿易いたし、
自然と日用之諸品迄一般高直ニ相成候間、今度諸色直下ケ之儀被仰出事ニ
候、然処右体之次第、右下通高直ニ相成候迄ニも無之、御国内日用之諸色
払底ニ相成候、就中生糸・繰わた・茶之儀は外国人買遂候ニ付、格別高価
ニ売揃、生糸・茶等ニ至候ては最初より外国人好ニ応し候様ニ仕立方ニ致
候より、御国地之遣料不足相成、一同難儀いたし候趣も相聞、以之外之事
ニ候、向後直段之儀は前々之相場に基引下ケ、製法之儀は何品に不寄仕来
之通相製、御国地差支無之様可致候、若一己之利徳ニ迷ひ、諸人之難儀を
不顧、触面之趣相背候者於有之は、無用捨吟味之上厳重可申付候事
右之趣御料・私領・寺社領共不洩様可触知者也
〆
当御時勢ニ付御家中をはしめ寺社郡町浦之者江一統旅出被差留候事
但無拠次第有之者ハ其趣申出、差図を受可申、自然忍に旅出いたし候も
のハ可被所厳科候条、其旨をも相心得可罷在事

寺社兼帯
町奉行

大目付江

矢野梅庵(平出)思召を以今七日職分被仰付、座席因幡上ニ被仰付、名相模と
相改候様被仰付、此段向寄江可被相達候事
右月番より及口達

大目付江

相模儀思召を以(平出)御軍事惣宰被　仰付、御財用方本〆を初メ、山城・因
幡江被　仰付置候廉々をも兼て受持被　仰付候、此段掛合口々江可被相達
候事

信濃

兼て存念申立之趣、具ニ達　御聴、梅庵江御軍事惣宰被　仰付ニ付、右受
持は御免被成下、尤此先とても存寄候儀は何廉不閣可被申合候事

大目付江

織部名丹後と相改候様被　仰付候、此段可被相達候事

寺社兼帯
町奉行

子八月

御触状写

此度長州御征伐被仰出候ニ付ては、此後御国中之者共商売筋等ニて長防江
罷越候儀も堅被差留候、勿論長防之者共御国内江入込セ申間敷旨被仰出候

条、其心得可致候、自然心得違之者於有之は可被処厳科候事

右之趣被得其意、郡中江急速可被相達候事

年番役所

九月十日

触次中

御書付写

松平美濃守

松平大膳太夫儀兼て禁入京候処、陪臣福原越後を以、名ハ歎願託、其実強訴、国司信濃益田右衛門介等追々指出候処、以寛大仁恕雖扱之、更ニ無悔悟之意言を左右ニ寄セ、不容易趣意を含ミ、既ニ自ら兵端を開対禁闕発炮候条其罪不軽、加之父子黒印之軍令條、授国司信濃由、全軍謀顕然ニ候、旁防長ニ押寄追討可有之候事

七月廿三日

御達書写

一筆令啓達候、松平大膳太夫追討被仰付候ニ付、其方儀は海路下ノ関より二ノ手被仰付候間、同所より山口表江馳向ひ、大膳太夫父子始誅戮可致旨被仰出候、松平肥前守儀も同様被仰付候間可申合候、小笠原佐渡守儀は其方共之援兵ニ被付候間、得其意可被仰申談候、且又長防両国江攻入之口々割合方之儀は、別紙之通被仰出候間、是又可被申合候、其当月中出陣之心得ニて出張日限之儀は、尾張大納言殿江可被相詞(伺)候、此段可相達旨、依上意如斯ニ候、恐惶謹言

八月十三日

御名

諏訪因幡守
阿部豊後守
牧野備前守
水野和泉守

陸路芸州より岩国、夫より山口江攻入候面々

松平安芸守
板倉周防守
真田信濃守
阿部主計頭

壱番

松平安芸守始応援之面々

二番

松平近江守
三浦備後守
板倉摂津守
本多肥後守
松平備前守
脇坂淡路守

陸路石州より萩、夫より山口江責寄候面々

松平相模守

壱番　松平右近将監
　亀井隠岐守

二番　松平参河守
　松平出羽守

松平三河守始江応援之面々
　有馬遠江守
　松平佐渡守
　松平主計頭

海路四国より徳山、夫より山口江攻入候面々
　松平阿波守

壱番　松平隠岐守
　松平讃岐守
　伊達遠江守

松平隠岐守始江応援
　松平壱岐守

海路下ノ関、夫より山口江攻入候面々
　細川越中守
　奥平大膳太夫

壱番　小笠原近江守
　小笠原幸松丸

小笠原大膳太夫領分近之儀ニ付、細川越中守・奥平大膳太夫、先立可被相向候、小笠原幸松丸儀、小笠原大膳太夫下一手ニ罷越可被相向候
　松平美濃守

二番　松平肥前守

松平美濃守始江応援
　小笠原佐渡守

海路萩江、夫より山口江攻入候面々
　松平修理太夫

松平修理太夫応援
　松平主殿頭
　有馬中務大輔
　立花飛騨守

右之通被仰出候ニ付、陣中之儀万事尾張前大納言殿御指揮ニ随ひ、速ニ遂成功候様被仰出候、陸路芸州岩国、夫より山口江攻入候面々

御使番
　松平左金吾

向井左門
小笠原鐘次郎

海路四国より徳山、夫より山口江攻寄候面々

同
水野采女
服部中
遠山左門

海路下ノ関、夫より山口江攻入面々

同
多賀靱負
曲渕鋳市
岩瀬敬太郎

海路萩、夫より山口攻入候面々

同
天野民七郎
平岩金左衛門
内藤平八郎

右之通為軍目付被指遣候間、可被得其意候事、右之通御触之趣被得其意、配下中江ハ早々可被相達候事

寺社兼帯
町奉行

九月四日

右御触之趣被得其意、郡内寺々無洩落可被相触候事、猶又写取有之左之郡々早々巡達可有之候事

年番役所

九月十七日

触次中

一筆申達候、然は御国方御用ニ付市中両寺・下部壱人、都合三人、来五日致出郡候間、同日正九ツ時揃、郡内寺別印判所持、遅刻無不参会所江出方有之候様可被相達候、以上

十一月五日

会所
万徳寺

年番役所

十月廿七日

触次当

御達書写

真宗両派

寺社之面々当御時勢ニ付、武芸相嗜候儀は先日より相達置候通ニ候、然ルニ西派真宗一派之儀は、多人数ニも有之、年若之者武芸之みニ指はまり、

修学等怠り候て、我等職を忘候様不勘弁之者は心得違ニて、修学等打捨候向も有之歟ニ相達、弥右之通りニ有之候ては、曽て不相済事ニ候、修学第一・武芸第二ニ相心得執行致シ候様ニ有之度、其辺り重畳被申諭、不相用不勘弁之者も候ハヽ、速ニ可被申出候、触次江も無遠慮申出候様被申聞置、兎角ニ人気穏ニて気立不申様立入申諭可有之候事

子十月

奉願口上の覚

一一派寺々之僧侶御軍事御人数罷出候様、猶又武芸稽古可仕旨をも御達被仰付奉敬承候、依て御請印形奉指上候

一一派限り罷出候とも軍事不馴之者斗り、却て御邪魔ニも相成候共、御用達は無覚束奉存候、何レ之御組ニ歟御指加奉願度候得共、出家と同組と申儀は六ケ敷事と勘弁仕候、然時は御用達も弥以無覚束、就ては事々御伺申上候ハヽ、何事ニよらす御指図は可被仰付候儀ニ御座候得共、西川善兵衛殿・建部武彦殿江は本山江も往昔由緒も有之、且建部氏江は先代別て一派中懇意之向も不少候間、稽古筋之儀は勿論軍事之儀等万端咄合等仕度趣申置候、是又私限り差押候儀も難出来奉存候、万一御支筋無御座候ハヽ、同方江は上よりも其宛リ御含被成置被下度候

御下知

御備組ニ被指加方之儀を御評儀之上可相達候、武彦・善兵衛ニは引合ニ及候

一仏之法衣を着し、殺生戒を守候僧分、殺生具を着し、人命を断候は境界不似合之儀とは乍申、一殺多生と申候経文之趣意も有之、一を殺、多を救候儀は慈悲之一ニ相成申候、依之武具を着し、御軍事ニ罷出奉報御国恩度奉存候、此段は申上置候

御下知

経文之語意、儒教ニも貫通し、神君以来之御掟も有之と存候間、書面之覚悟にて可然候

一職業相怠り、武芸のみ之儀ニ相成候ては、僧分之境界を忘レ気荒立、御厄介筋之儀も増長仕可申候、依之住職分之僧は生立之後住共江教示修学仕らせ度、猶住職法用、寺役も御座候、其上寺務之僧は老分勝ニも御座候得は、武芸稽古等後住・二三男同様ニは難出来奉存候、此段は御含置可被仰付、尤海岸ニ異船押寄候節は不惜身命ニて罷出度奉存候、但住職分之内ニも若僧武芸稽古出精仕候者も可有之、右は人々心さし次第ニ仕度候

御下知

但書共承置候

一職業之儀は武芸相双へ、同様出精可仕候様■（ニもカ）御達奉願度候、左候ハヽ、気立申間敷奉存候

御下知

達方之儀は加評儀可申候

一一郡ニ一両寺宛リ目附寺相立、僧分不似合之振舞有之は取締り度、職業・武芸共出精仕候様仕度奉存候

一若僧近来風俗悪敷、不学之者多御座候間、春秋両度一郡ニて学業成就之僧より経巻等講釈いたし聞せ度、一郡ニ一二ヶ所宛り仕度奉存候

御下知

三ヶ条之趣可然候

一御上ニも御事繁奉恐入候得共、難渋之寺々江は稽古道具は鉄砲等は御貸し渡奉願度候

御下知

御詮儀可申出候

一帯刀　壱腰

一長刀　壱振

一騎馬　壱疋

御旗本之組ニて帯刀本山より被申付儀ニ御座候

御下知

本山之御定書等有之候哉

一相図鐘、近村迄は聞付出張可仕候得共、遠在之寺々ハ非常之節飛脚ニては間ニ合申間敷、如何可仕候哉、奉伺候

御下知

遠在之寺院は承り次第急速之出張ニて可然候

但浦々寺院は其処之警衛御人数も出張可有之ニ付、在寺ニて相控候時宜兼て難斗候

一他国出張之儀は御断奉申上候、奉恐入候得共、僧分之儀ニ付其段は宜敷御聞通り奉願候

御下知

万々用意相整候共、他国出張御断ニ候哉

一只今事立候節は罷出可申心底ニハ御座候得共、大小武具等一切何之用意も無御座候、袈裟衣のみニて難罷出、武具は御渡可被仰付候得共、万事用意無御座候間、当時之儀は御断奉申上候

御下知

内海江異国船乗入事立候節之儀候哉

右之内御尋ニ付申上候箇条

一公儀御幕下帯刀・長刀・騎馬等之儀、本山定書等有之哉之旨御尋被仰付、右は従来一派ニ所持仕候御書附写、別紙之通りニ御座候間、奉差上候、然ニ不慥思召御座候ハヽ、本山江相伺可申候哉、右書写仕候分ニて御聞済被仰付候儀ニ御座候哉、奉伺候

一他国出張之儀は住持分ハ其職役も有之、後住・二三男ニ仕候ても境界の儀ニ候得は、一派より御断申出候儀ニ御座候、右は其節之時宜ニしたかい御上命を承り可申上候

一法衣のみニては出張難仕、当時御断申上候儀は追々用意等も仕居申候得は、内海江異船乗入事立候ハヽ、罷出可申候得共、是又其節之時宜ニ随ひ可申候、専ら諸芸相励可申候様奉存候

貴坊末流（派歟）は此方幕下同様ニ候、依て騎馬壱疋・太刀壱腰・長刀壱振可為授与事

家康　在判

慶長七年

御一流之僧侶可致帯刀之条、慶長七年依公命被仰出之処、諸国関守等不案内ニて猥リニ構問之由相聞候、向後斟酌有之間敷候、尤急事所用之間所持之程可相改儀被仰候也

集会所
月番

諸国
御末寺中

関東御掟目写

一旦那之者随分法式不乱様、毎々旦那寺より吟味可致事
一旦那男女奉公人・召抱之者出入之節は旦那寺江相届可加宗旨帳面事
一旦那之内縁付、又は不縁之儀無相違旦那寺江可相届事
一寺判替之節は早速奉行所江可相届事
一住持代替之節早速奉行所江可相届事
一此度御下被成候宗旨御掟目置、向後急度可相守事
明和九年
辰五月十三日
右之趣従公儀被仰渡候間、不洩様可致承知候事

ナシウチエホフシノ図
紐六尺
白ぬの
しころさかり八寸



（裏表紙）
壱　法喜山

史料紹介　品照寺文書
天保十一年「御触控」・元治元年「寺・国　御触状写　二」

鷺山智英

筑紫女学園大学
人間文化研究所年報
第三十一号　二〇二〇年